1. コロナ禍における ISMRM Annual Meeting Program Committeeの活動

木下 学 国立大学法人旭川医科大学脳神経外科学講座

2020年に始まった新型コロナウイルス感染症（以下，COVID-19）の蔓延（コロナ禍）は，世界中のあらゆる業界に大きな影響を与えた。2020年の国際磁気共鳴医学会総会（ISMRM Annual Meeting）は史上初めてオンライン開催され，これまでとはまったく異なった学会参加体験となった。年次総会の演題選択や教育講演の企画を取り計らうのが年次プログラム委員会（Annual Meeting Program Committee：AMPC）であるが，この運営もコロナ禍の中で行うことが必要となり，従来のAMPCでの活動とはまったく異なったものになった。コロナ禍前後にわたってAMPCの活動にかかわることができたので，その経験を共有したい。

AMPCのコロナ禍前の活動

AMPC委員の任期は3年であり，筆者は2019年（モントリオール開催），2020年（開催予定地シドニー：実際にはオンライン開催）と2021年（開催予定地バンクーバー：実際にはオンライン開催），それぞれの年次総会のプログラム委員を担当した。AMPCの活動は以下の4つに大別される。

(1) 次々会のNamed lectures（Lauterbur，Mansfield and NIBIB New Horizon lectures）の決定
(2) 次々会のプレナリーセッションのトピックの決定と演者の選定
(3) 次会の一般演題の評価と発表セッション構成
(4) 次々会の教育講演のトピックの決定と演者の選定

コロナ禍前（以降，“従来は”とする）は，1月の週末金曜日夜～日曜日昼過ぎの時間を使って，上述の4つのタスクをこなしていた。AMPCは総勢100人弱の委員で構成されている（**図1**）。タスク（1）と（2）を初日夜に終わらせ，土曜日を丸1日使用してタスク（3）を完遂し，日曜日にふらふらになりながらタスク（4）を終了させ，帰途に着くというスケジュールであった。総演題数も多く，毎回の年次総会を，考えられうるかぎり理想的なものに仕上げることがAMPCの目標であり使命でもあるため，学会運営という観点においてこの活動を通して学ぶことは多い。また，“泊まり込み合宿”の様相を呈するため，いろいろな国の一流の研究者らとの親睦を深めることができる貴重な機会である。その一方で，限られた時間の中でかなり多くの意思決定をする必要があり，筆者にとっても1年の中で最も“アタマ”を使う3日間であっ

図1 2020年，コロナ禍が始まる直前にバルセロナで開始されたAMPC
筆者は脳グループ（Neuro Table）に割り振られ，脳画像を専門とする他委員と協働してセッション構成を完成させていった。